

英知が深化する秋

甲州路を染める紫の四季彩、換気のため開放された車窓から流れ込む葡萄の芳醇な香り。故郷には都会で感じることの少ない豊穡の秋が訪れている。

彼女は車窓に広がる葡萄畑の風景に安堵を覚えつつ、手元の小説のページをめくる。三密を避け、お盆から約一か月遅れの帰省となった。十八歳で上京し、現在は在京一部上場企業に勤務している。実家は山梨県甲府市、ワイナリーを営む。

二〇二〇年。新型コロナウイルスが瞬く間に世界中に拡がり猛威をふるう。ここ日本でも日に日に増していく感染者数、死者数に皆が不安を抱いている。今年三月には全国公立学校での休校措置、四月、五月には緊急事態宣言が出され、不要不急の外出の制限、店舗の営業時間短縮、在宅勤務の推奨など、経済活動にも打撃を与える。

そんな中入社五年目の彼女は、コロナ禍による巣ごもり需要を目論み、イタリアからインテリア商品を買って付ける。



※演出上マスクの着用はしていません。

知の宝庫に包まれる春

初めて任された大きな仕事だったが、彼女が買い付けた商品はまったく売れなかった。失敗に意気消沈する彼女は、何とかその対応を終え、連休を取って故郷山梨へと向かった。

長かった髪をバツサリ切り、癒しを求め、地元の古書店を訪ねる。そこは幼い頃より父親に手を引かれて通っていた小さな古本屋さん。在京大学進学以来久しぶりの来店だったが、店内は今も昔と何も変わらない。彼女は片隅にある深緑色の大きなアンティークソファールを見つけた。子どもの頃、その上でピョンピョン飛びはね遊んでいたお気に入りのソファード。店主はそれをいつも笑って許してくれていた。

奥から店主が出てきた。皺は刻まれたものの、今も変わらず温かく優しい笑顔で迎えてくれた。彼女は、懐かしさとともに張りつめていた様々な思いがこみ上げ、あふれ出る涙をおさえることができなかった。

物語に出てくるPOPに描かれた

ソファールには後日談があり、当時リラの円換算を1桁間違え、店主はクレジットの請求額に青ざめたそうです。

